

今回は当連載の総括を述べたい。当初は「おふでさき」全十七号を通読する予定だったが、連載が3年経ったことと、「おふでさき」の取り組み方を変更したい思いが強まってきたことから、途中ではあるが第六号を読み終えたところで一つの区切りとして、次への準備にしようと思う。

当連載ではいくつかの読み方を試みた。初めの頃は「おふでさき」を他の思想文脈において理解しようとした。次第に、「おふでさき」を散文体へと翻訳的に理解するようになった。また、基本的には、布教実践を通じて理解するようにもしていた。そのように試行錯誤して学んだことは、「おふでさき」が信仰の書として顕現する条件としては、そこに何が書かれているのかという問いを「解釈」ではなく「受容」の範疇で扱うことが必要だという点である。

「おふでさき」を、ある一つのメッセージを乗せた透明な媒体としてではなく、あらゆる色のついた言葉の「織物」(textile)と見なすとき、テキストの意味は複数的に見出されて、文字通り“色々な”解釈が許容される。それはロラン・バルトのいわゆる「作者の死」という言葉が示すようなテキスト解釈であり、そこには意味の増殖への肯定がある。しかし、そうした意味の幅を認めることと、揺れ動く意味から「ある意味」を一たとえそれが複数であっても—“受け取る”こととは別の水準にあり、信仰という営為は後者の水準においてより積極的に成立するように思われる。というも、信仰では、言表の内容以上に、その受け取り方の深度（納得の度合い）が主題化されるからである。それは決して信仰がある一つの意味を取捨選択して、その真理性を主張するというのではない。受容とは、意味の排他的な選択というより包括的な集約のプロセスであって、必ずしも他者への主張と結びつくわけではなく、その意味の“確かさ”が自己の内て深まることを示している。

私にとって、その一つの例は、第一号45から50までで詠われている「道」の喩えである。「道」という語句が持つ内包的・外延的な幅は広大であり、それを整理する作業は必要であるにしても、私においては、最近自分の信仰が「道」として捉えられるようになってきた実感がある。それは50で「神一条で、この話が我が事になる」と詠われているように、私の「神一条」の程度に依じて、「道」なるものが私にとって「我が事」になってきたのであろう。

ところで、こうした「道」の信仰的な受容は、ある意味循環論的なプロセスでなされているともいえる。というも、私が上記のように「道」という語句から自分の実存に触れるような意味合いを見出したのは、そもそも私があるような意味での「道」を歩もうとしているからである。これは、これから受け取るはずの意味をすでに自分が有しているという点で循環論的である。ただし、そのような論点先取の見方は、二つの異なる次元を同一平面で論じるからであると思われる。

私が「道」を歩もうとしている次元—仮に倫理的次元—と、テキストを解釈する次元—仮に記号実践の次元—とは区別され得る。意味の増殖や、解釈の幅の担保が求められるのは後者の次元だが、意味の受容とは二つの次元を横断するような営みで

あろう。つまり、倫理的次元で自己の拠り所となっているような意味が、テキスト上で揺動する意味の大海での一つのアンカーポイントとしての役目を果たしている。こうした二つの次元を行き来する—つまり循環する—営みとしての受容が「おふでさき」を信仰的に読むことの一つの条件であろう。このことは、言語の本質をどこに置くか、ということとも関わる*。

さて、当連載を「おふでさき」の有機的展開と銘打ったのは、「おふでさき」に見出される意味が読み手の信仰として昇華し発展していく様を思い描いたからであるが、それはテキスト発の発想といえよう。つまり、記号実践の次元から始めている。しかし、先ほど記した受容という営みは、テキストに対して受身的であるばかりでなく、倫理的次元で自己が獲得した意味をテキスト解釈の拠り所として積極的に活用するという態度も含意している。当連載の反省としては、倫理的次元から始める態度、すなわち、「信仰者の視点から『おふでさき』を読む」という態度が、それを常に念頭に置きながらも「おふでさき」発の読み方をしていたので、結果として不十分であったように思われる。「おふでさき」が有機的に展開する流れに身を任せるのではなく、みずからその流れを生み出すという“賭け”がなければ、みずからを賭した信仰的な読み方としては十分とはいえない。

そこで、これからの課題としては、まずテキストありきの読み方ではなく、まず信仰ありきの読み方、言うなれば、「道」の上で「おふでさき」を読むという読み方が求められる。その際、「おふでさき」は、その「道」での道標、標石、地図、ガイドブックのような役割を果たすと思われるが、とりわけ標石という語句に着目したい。

標石は、石面に文字が刻まれている点で言語テキストではあるが、それと共に“そこに置かれている”というメッセージを放つ指示物である。たとえば、標石の文字を読み違えて目的地に辿りつけなくとも、標石のある場所に戻ってくれば—「置かれている」という指示を受け取れば—ルート変更も可能になる。つまり、標石としての「おふでさき」は「道」の上にある言語テキストでありながら、「道」の上にある—そこに置く—ことで何かを示していると考えられる。このことは、第一号23の「違いあるなら歌で知らず」という「おふでさき」自身が示す役割とも合致する。こうした含意から、信仰ありきの読み方のイメージの一つとして、これから「おふでさき」を「道の上の標石」として捉えて読んでいきたいと思う。

思えば、これまでは「おふでさき」を有機物として捉えて、その発展を願ってきた。しかし、これからはみずからの信仰の発展を願って、「おふでさき」を精神的な無機物、つまり「道の上の標石」として探求していく。次号からは、「『おふでさき』の標石的用法」と連載名も変更して、これまでとは違った読み方をしていきたい。

[註]

* 詳しくは、鶴真一「他者へのかかわりとしての言語—キェルケゴールとレヴィナス—」『新キェルケゴール研究』第2号、2002。